

徳川家康が信頼した

「万端の用人」、 本多富正



本多富正像
(藤垣神社蔵)

関ヶ原の戦いの後、越前の地を治めた福井藩祖、結城秀康。秀康に仕え、家中の万事を司った重臣として「万端の用人」とまで称された人物がいました。府中領主の本多富正です。

本多富正は、元龜3（1572）年、三河国（愛知県）に生まれました。14歳の時より結城秀康に仕え、九州島津征伐、小田原北条征伐など多くの戦いで功績を残します。そして、慶長6（1601）年、秀康の越前封入に伴い府中領主となりました。富正は、現在の越前市役所周辺に館を構え、日野川の治水工事や町

用水・道路の整備、館を中心としたまちづくりなど、優れた内政能力を発揮しました。

慶長20（1615）年、大坂夏の陣が勃発。福井藩は、5月6日の戦いで徳川方の兵に加勢をせず、徳川家康から「昼寝をしていたのか」と叱責されます。翌日、富正は、藩主松平忠直の気持ちを受け、討死する覚悟で、先陣の命を受けていた加賀藩に先駆けて、真田信繁率いる軍勢に攻め入りました。見事、真田軍を撃破した富正は、大坂城内へ突入。堀を登り、「天下一番乗りは、越前

の先手本多富正なり。敵も味方も確かに聞け」と叫んだといいますが（『本多家譜』）。富正は、本丸一番乗りの証拠に、千鳥の屏風、千畳敷の大床張付の絵4枚を持ち帰りました。大坂城一番乗りの偉勳を受け、幕府は、福井藩から独立して大名になることを勧めましたが、富正は「自分は主君・秀康公に終生忠誠を尽くしたい」と断わったといわれています（『本多家譜』）。



千鳥の屏風（右隻）
(藤垣神社蔵・越前市武生公会堂記念館寄託)

本多富正が残した足跡の一つに、依屋宗達による「西行物語絵巻」（重要文化財、出光美術館蔵）の模写本の制作があります。富正が依頼し、鳥丸光廣（公家で、当代一流の文化人）が天皇所持の絵巻を借り出し監修をした世紀の大企画でした。宗達が絵を、能書家として知られた

光廣が詞書を担当して、約10年余の年月と莫大な費用をかけた絵巻の制作。この大事業を光廣に依頼したのは、富正が仕えた結城秀康の未亡人、鶴子が光廣の妻となっていたからといわれています。ここにも、主君への忠義があったのかもしれない。

本多富正は、慶安2（1649）年、78歳で没するまで、忠直、忠昌、光通に至る4代の藩主に仕え、約半世紀にわたり、福井藩を支え続けました。富正が死去したとき、福井藩は「国中、父母を失ったかの如し」であったと言われています。富正は、福井の万事を司っていたまさに「万端の用人」だったのです。

関連史料・ゆかりの地

龍泉寺



つうげんじやくれい
応安元（1368）年に通幻寂霊によって開かれた寺。府中領主であった本多家の菩提寺であり、本多富正以来歴代の領主とその家族が葬られています。
【住所】越前市深草1丁目10-3（JR武生駅より徒歩15分）